

特集 鼠径ヘルニア手術の UPDATE (前方アプローチ)

君津中央病院における鼠径部ヘルニア手術の現況

国保直営総合病院君津中央病院 外科

柳澤 真司、片岡 雅章、西村 真樹、小林 壮一、岡庭 輝
 須田竜一郎、中台 英里、大野 幸恵、鈴木 謙介、石神 恵美
 粕谷 雅治、進藤 博俊、廣川 朋矢、安藤 英俊、海保 隆

はじめに

君津中央病院では年間150~200例程度のペースで鼠径部ヘルニア手術を施行している。当院での鼠径部ヘルニア手術の現況を報告する。(図1)

対象・方法

2019~2021年の3年間の鼠径部ヘルニア症例は497例(2019年:173例、2020年:180例、2021年:144例)、539病変であった。年齢、性別、分類、術式、合併症、術者などについて後方視的に検討した。

結果

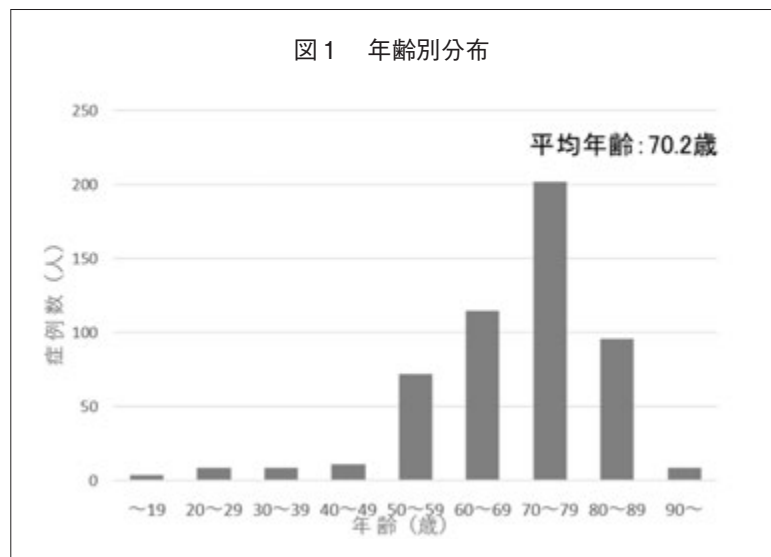
1. 年齢、性別

年齢分布を示す(図1)。16~97歳で平均年齢70.2歳だった。70歳代が多い。男:445例、女:52例であった。

2. 部位、ヘルニア分類

左右については左側:200例、右側:255例、両側:42例であった。

新JHSによるヘルニア分類を表1に示す。鼠径ヘルニア:506(93.9%)、大腿ヘルニア:25(4.6%)、鼠径・大腿混合型:3(0.5%)であった。鼠径ヘルニアの中ではL型:401、M型:99、混合型6であった。またNuck管水腫:3、精索水腫:1であった。再発症例の手術は12例であった。



部位	症数 (%)	L (79.3%)		M (19.6%)		L-M混合型	
		症数	割合	症数	割合	症数	割合
鼠径	506 (93.9%)	401	79.3%	99	19.6%	6	1.2%
大腿(F)	25 (4.6%)						
鼠径・大腿混合	3 (0.5%)						
その他	4 (0.7%)						
不明	1						

3. 手術術式、麻酔

手術術式を表2に示す。全例前方アプローチにて手術を施行している。メッシュ使用：520（96.5%）、そのうちDirect Kugel法：429、Mesh Plug法：90。従来法：16であった。従来法16例のうち、Marcy法とPotts法を行った症例は20歳代までの若年例であり、他は嵌頓による緊急手術で腸管切除を施行した症例：8、および多量の腹水を認めた症例：2であった。

表2 術式

メッシュ使用	520 (96.5%)	Direct Kugel法 Mesh Plug法 Lichtestein法	429(82.5%) 90(17.3%) 1
従来法	16 (3.0%)	McVay法 Potts法 Marcy法 Bassini法 iliopubic tract repair 大腿法	4 4 3 2 2 1
その他	3	水腫切除	3

前立腺全摘術後が20例あり全例Mesh Plug法を施行していた。

麻酔は腰椎麻酔：409（82.3%）、全身麻酔：88（17.7%）であった。

4. 術者

初期研修医：156例、外科専攻医：307例、スタッフ：20例であった。

5. 術前抗血栓薬使用例

何らかの抗血栓薬を98例（19.7%）が服用していた。

6. 入院期間

当院では、手術前日に入院し、術後2日目に退院とする計4日間のクリニカルパスを設定している。予定手術458例中448例（97.8%）がクリニカルパス通りに退院した。

7. 緊急手術症例

緊急手術は39例で全例がヘルニア嵌頓によるものであり、うち大腿ヘルニアが15例（38.5%）を占めていた。また大腿ヘルニア25例中緊急手術例は60.0%を占めていた。8例に腸管切除を要した。またその他に15例に嵌頓歴があった。

8. 術前抗血栓薬使用例

何らかの抗血栓薬を98例（19.7%）が服用していた。

9. 術後合併症

ほとんどの症例に多少の腫脹や疼痛はあり、術後外来に症状があり2回以上通院した症例を合併症ありとした。125例（25.1%）に何らかの合併症を認めた。（表3）

全身の合併症としては脳梗塞：2、肺炎：1、および嵌頓・腸管壊死から敗血症を発症した1例が死亡したが、受診時より全身状態不良な症例で

表3 合併症・後遺症

なし	372 (74.8%)		
あり (重複あり)	125 (25.1%)	脳梗塞	2
		肺炎	1
		敗血症(術死)	1
		SSI	10
		腫脹・硬結・血腫	61
		漿液腫	25
		疼痛	25
		骨盤内血腫・DVT発症	1
		その他	8

あった。

局所合併症としては腫脹・硬結・血種、漿液腫、疼痛が多い。このうち慢性疼痛が3例ありこのうち1例がメッシュ除去を行い症状軽快していた。また1例に骨盤内血種圧迫によるDVTを合併しヘパリン投与を行った。

尚、同時期手術例の再発例は確認していない。

考察

当院は人口33万人の君津医療圏唯一の中核病院であり、当地区のヘルニア症例のかなりの方が当院に集まると考えられる。また県域北部に比べより高齢化が進行している。平均年齢は70.2歳で70歳代が中心であった。2020年よりのコロナ禍での診療制限、手術枠減少で手術症例はやや減少しているが、最近では常時40～50例程度の手術待機患者がいる。

術式は前方アプローチによるメッシュ再建を原則とし、各術者の判断で決定している。主にDirect Kugel法またはMesh Plug法を選択しているが、近年はDirect Kugel法を基本とし腹膜前腔の剥離が困難と考えられる症例にMesh Plug法を採用している。前立腺全摘術後の症例が増加している印象がある。メッシュ非使用例は、腸管切除例・多量腹水貯留例、または若年例であった。

予定手術は原則として初期研修医または外科専攻医が術者を担当し、スタッフが助手をしている。初期研修医にも積極的に術者を担当してもらい研修のモチベーションを上げるようにしている。腰椎麻酔が原則で外科医が施行している。近年は抗血栓薬を服用している患者が多く、休薬可能かどうかで麻酔法を選択している。

予定手術の97.8%がクリニカルパス通りに退院していた。合併症・後遺症については、術死が1例あるがやむを得ない症例と考えている。慢性疼痛再手術が1例、骨盤内血種・DVT合併が1例あるが、他に重篤なものはない。

初期研修医、専攻医がほとんどの症例の術者を担当しているがほぼクリニカルパス通りに経過し、合併症・後遺症に関しても概ね許容範囲であると考えている。しかし腫脹、疼痛等については個人の感じ方も大きいと考えられ、退院後1回だけの観察例が多く再発も含め後遺症の詳細な検討のためには丁寧な経過観察を要すると思われた。

まとめ

当院における鼠径部ヘルニア手術についての現況を報告した。